
十円玉くらいの痣

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十円玉くらいの痣

【Nコード】

N1824M

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

介護職員になって一ヶ月。夜勤の研修を受けているときに、一人の利用者の手のひらに痣を見つけた話。

(前書き)

このお話は実在の団体、個人とはまったく関係ありません。

二十二時の半分以上が過ぎていた。

研修についている上司は他の利用者の様子を見に行くと私に言っ
て、一つ仕事を言っていた。

「聡子さんのトイレおねがいね」

私は暖かく湿ったタオルとそれを入れるバックを用意して、から
らと引き戸を開けて聡子さんの部屋に入る。

初めの頃は正直夜数時間おきにトイレに誘導したりするのは違和感
を持った。滅多にトイレのために夜に起きるなんて事はないし。

「聡子さん、おトイレですー」

ぼんぼんと肩を軽くたたきながら、布団をとり返答と目を開けたの
で、そのまま誘導して一人で楽しげに呟き続ける聡子さんに靴をは
める。

「あ、あら貴方の色良いわねえ、良い」

と聡子さんは私の服の胸元を指で突つついた。そうですかあと返事
をしながら私は聡子さんをトイレに誘導した。

聡子さんは耳が少し遠くて、最近周りの言葉がよく分からない事が
多くなってきていた。

でも人好きで楽しそうに話したりする人だった。

聡子さんの下の服を下ろしたときに肌に赤みがでているのに気がつ
いた。何度もかきむしった後くらいに赤い。研修の初めの頃は驚い
たものだった。福祉の勉強なんてちっともしてこなかったから、老
人の体なんてさっぱりで、こんなに肌が弱いのかと少々びっくりした
りもした。

きつとこのトイレの誘導まで同じ姿勢でいる時間が長かったのだろ
う。肌が老齢で弱くなっているのと同時に寝返りが打ちづらいし。
しかし以前に比べて痛々しさすら覚える肌の赤みに慣れたなと感じ

た。

聡子さんの様子をうかがうと表情は明るかった。声の調子は弱いながらも張りがある。

聡子さんはすごく明るい人だ。不思議な歌をよく歌う。拍子をあわせて一緒に歌うと楽しそうだ。でももう食事をする認識も、トイレの認識もだいぶ薄い。きっと外に出たら何も怖くないから簡単に死んでしまうのは想像できる。そして自分の状況が分からないから、きつと軽いけがならそれがどういう事なのか分からないだろう。重い痛みでもきつと訳が分からないだろう。何とか命に対する感覚が異常に弱まっていて、危機感がない。

本当何を考えているのか、いや見ているのか分からないんだよねあ
と思いながら私は聡子さんをベットに横になってもらい布団を掛け
た。その時だ。私は思わず首を傾げた。

ベットの柵をぎゅつと握った聡子さんの手の甲、正確には親指の下
に十円玉くらいの黒がかった紫のしみ……恐らくは痣……があった。
どうしよ、これと一瞬考え込む。痣な気がするが判断がつかない。
こういうものを見るのは初めてだった。それでも数日前に介助した
ときは見なかったのは確かだし、上司に報告して判断してもらおう
と思いながら私は部屋を出た。

キッチンにつけられたほのかな明かりしかなく、足下のみがかるう
じて見える明るさしかないリビング。利用者さんがこしかけるソフ
アがぼうとその輪郭だけ浮き上がり、食事や活動をするための木の
厚い机は静かにどっしりと佇んでいた。リビングの真ん中、テレビ
の前にすらっとした男の影が見えた。上司だ。私は音を立てないよ
うに小走りで近づくと、そのまま聡子さんのトイレがすんだことと
手の甲にある痣みたいなものについて報告した。

「あーそうか……」

報告が終わると思案顔になっていた上司は私にトイレの記録をつけ
るように言い、自分は聡子さんの部屋に向かった。

一分もかからないうちに戻ってきた。

思案顔は相変わらずだが、状況を確認しているのかこくこくと小さくだが頷いていた。

「どうだったんでしょか」

「うーん、痣だねあれは」

「親指の下に？」

普通できるんだろうか。痣って事は皮膚の中で出血している事だから、皮膚が破けない程度で衝撃があったことになる。でもピンポイントに親指の下だけってどうあたれば……

考え込む私に上司は声をかけた。

「後で事故報告としてあげるから、とりあえず次の時間帯にトイレに行く人を調べてきて」

はたつと意識を戻して私は思わず頷いた。

「は、はい。わかりました」

どうも物事に一極集中してしまう。私は頭の後ろをかきながらトイレの記録を書かれた表を見に行った。

相変わらず城戸さんのおむつ交換が苦手だ。

あの子犬が母犬を寂しくて呼ぶような感じがする悲痛な声であせってしまつて余計に時間がかかる。敏感な人なんだよなあ色々な意味で。痛みとか悪口とか悪いものに関してだけでなく、ドリフのDVを見ていかりや長介が出ただけで入れ歯がはずれかける勢いで笑ったりする。私にとつちや、いかりや長介って俳優さんなんだけど。しぶくて、同時に温かい感じがして好きだったなあと手を洗いながボタンと戸が強く閉まる音がして、慌ててそっち側を見た

花岡さんだ。うちのユニットで一番の注意人物、理由は徘徊と異食（おむつでも洗剤でも食べるらしい……正直想像が勝手に止まるレベルの話だ）後目に付く物があると壊してしまうらしい（確かに他の利用者の方の部屋番号がかかれた札が割られ修復されていた）パジャマの下は着ていない、きつと気持ち悪くなって脱いだのだろ

う。寒そうに腕をさすっていた。花岡さんは寒がりで手の先が結構冷たくなりやすいから、夜間の空気は相当こやえるのだろう。

「散歩に行きましょうか。花岡さん」

声をかけると花岡さんは一瞬目を丸くしたが表情が和らいだ。時刻は五時半を回っている。今からビデをつかって陰部を洗って着替えたら、次の仕事をする時刻としていいだろう。

廊下をぐるりと回って花岡さんの部屋に向かう。閉められた窓のカーテンの隙間から、白い光が漏れだしている。夜明けは迎えたのだ。まだ二時間程近く仕事はあるが、朝が訪れただけで息をつける自分がいた。夜の長さは緊張と焦りと不安をあおる。

一番大変なのはこの方だよなあ。

私はユニットのドアをゆっくり閉める花岡さんを見ながら思った。さつきもビデで洗った時に、動物の断末魔みたいな声を上げて内心とてつもなく驚いた。だが感情を表に出すと一気に不安が相手に伝わって、花岡さんの精神の安定性が保てない。興奮、覚醒しきったら徘徊が止まらなくなり、他の方の居室に入ったりして、他の方の平穏も保てなくなる。

さすがにそれは不味い。

「花岡さんのためにお洋服を用意したんですよー」

「あら、そう。ほほ」と上品に花岡さんは笑った。元大きな劇団で女優をされただけあって、花岡さんの（落ち着いているときの）態度は基本女性らしい。

きつとその細やかな女性らしさ、神経が老人になるとともに煮詰まって、濡れて不快だとズボンを脱ぎ、相手の負の感情を感じて苛つき叫ぶのだろうか（確かに人に下の世話を受けるって屈辱的ではある）まあ認知症の人って幼い子供の親の感情の察し方（反発）以上に鋭いけど。

「花岡さん、その茶色いのここまで下げてくれますか？」

私は花岡さんの下の下着を股間から白い股の真ん中に持っていただけけるように頼んだ。

「ああ……うん、そうね」

花岡さんはぺたんとトイレの便座に座りながら言った。しかし立ち上がる気配はない。

本当は職員が腰に手をまわして下ろしてしまえばいいのだが、それをされたら動物の断末魔……みたいな声がでる。

一度聞いた分、嫌悪と恐れが生まれている。

さっきからこの会話は十回近く繰り返している。時刻は刻々と過ぎて次の業務が差し迫っている。塩野さんのトイレの介助に行かなきゃいけないし、早起きでもある聡子さんがカートを押して散歩しだすかもしれない。だけど強行的にやって大声を出されて興奮してしまったら、他の業務なんてまったく出来ない。不安も悟らせてはいけないが、花岡さんの顔が強ばりだしていて、きっと私のイライラが伝わっているだろう。ああその通りだ私、花岡さんをちよつと怒鳴りつけたたい。だけど大声を出したらもっと大変な事になるし、利用者さん（お客さん）の保険で給料をもらっているわけだけど、そういうのかなぐり捨てたいくらい腹の底がムカムカする。そんな中で花岡さんが立ち上がる、私は同じように下の下着を少し降ろすように頼んだ。

「えーああ、そうねえ」

花岡さんの指は下着の線をなぞるように動き、そのままだらんと体の横に下がる。どうも無理だ。一瞬考えたが、そつと花岡さんの下着に触れた。やった後が恐ろしいが、しょうがない。次の仕事につつかかってしまう。それに大分疲れていた。このやりとり。

「すいません、花岡さん」

ぱしっと花岡さんの手が私の手を払った。

「触らないでくださいよ」

苛立ちを含んだ空気が一気に緊張感で満ちた。花岡さんの言っていることは分かる。職員の前とはいえ、人前で服を脱がなきゃいけないなんて恥ずかしい。だけど同時に花岡さんは公的な場所に出られるだけの認識も判断力もない。花岡さんの常識はこのユニットの中

では正しいけど、正直その常識はあまりにも繊細でその時の気分によって変えられて、やってられなくなる。仕事がつまっていると尚更に。花岡さんはここがどういうところか分からないだろうし、何故ここにいるのか分からない。ただ暮らし過ぎている。

「家にいる」 だから……辛い。

雰囲気作りが難しすぎる。あくまで私は職場にきてるから。業務をきちんと終わらせないという想いが止まらない。それにここで陰部をきれいにしないと、後で（今も）辛いのは花岡さんなのに。

私だって花岡さんのやられたくないことをやりたくないのに。本当にしょうがないからやっているのに。

必死で浮かべていた笑顔がひくつくのが理解できた。

そこで名前を呼びかけられた。声をかけられた方を見ると、上司が手招きしている。

私は立ち上がり、上司の側へ行く。

「ちょっと交代ね」

トイレに入っていく上司。ぱたぱたと物音がしてスムーズに作業が進んでいくのが音だけで伝わってきた。上司はもう十年近くこの仕事をしているし、花岡さんとの付き合いも長いからすんなりといく。その事実はいやってくらい分かっている。だけど時間を考えて、状況をふまえて、やるべき事をやらなきゃいけないという仕事の状況で、すんなりとやれるようにならなきゃ、いけないと思う。時間の遅れは一日の生活のリズムを崩す。それって誰が傷つけるのか。利用者さんの生活が保てなくなるのは、かなりよくないのに。考えるだけで頭がふらついて重くなった。

本当よく顔色も変えずにどんな状態の利用者にも対応できる。それがプロだと言われても、頭では理解しても、心の容量が越えてしまう。「それはしょうがない」と母は言っていたが、しょうがないで目を背けるわけにはいかない。仕事という金をもらう重みが心にかかる。

上司が部屋から出てきた。

「あのねえ、背中からね。こっちは一生懸命やっているのに、どうして分かってくれないのってオーラが出てたよ」

「あ、う……すいません」

「そういうの花岡さん、すぐ分かっちゃうから。前は確か出来てたよねー」

「そうですね」

あの時はまだ余裕があった。研修期間が一ヶ月も残されていたし、だけど今は一応決められた研修期間が迫っている。研修が終わったら、私がこの九人のユニットを一人で回さなきゃいけない（日勤の人もいるけど、必ずいるとは限らない）

時間の配分考えないと次の人に迷惑がかかるのも事実で、結果的に一番に利用者さんに迷惑がかかる。思案顔の上司が言った。

「ちよつと業務中心になっていくんだよね。利用者さんの調子と合わせたら楽だって分かってるでしょ」

「は、はい」それは実感している。

「ペースに合わせた方が業務はすんなり進むし、それに無理をすれば」

そこまで言いかけて上司は横に手を振った。

「あー今日、事故報告を書くって言ったでしょ。そこで話すね」

「は、はあ」

私が曖昧にうなづくと、上司は次の業務は何かと聞いてきた。私は記録と今までの流れを思い出しながら答える。そしてそのまま次の業務へ動き出した。

次の早番の人に申し送りをすると、上司はパソコンを使って事故報告を書いていた。

ちよつとユニットをのぞくと聡子さんが着ている服の上に厚手のセーターを腕を一本通している状態でカートを押していた。行き先は廊下だった。

「……ちよつと、すいません」

と上司に言ってから聡子さんの元へいく。

早番の人は塩野さんの介助に行っているようだ。難聴の塩野さん向けの低く伸びるような少し独特な感じがする声が聞こえてきた。

「聡子さん。おはようございますー」

「あ、う、ふうん」

聡子さんはにこにこしている。十円玉くらいとはいえ痣が出来ているのだが、まったく気にしていないみたいだ。

「ちょっとごめんなさいねー」

私は聡子さんを部屋に連れていき、中途半端に着られていたセーターを脱がせ、リビングのいつも座っている席へとお連れした。

聡子さんはずっと笑っていた。

「い、良い色。素敵ねえー」

認知症が進むとたくさん情報を一度に頭に入れきれない。だから誘導して、生活を作る事をしないとイケない。だけどそんな状態でも、聡子さんはとても色にこだわる、模様にこだわる。

「素敵ねー」とおぼつかない口調で私の服を指さしたりほめたりする。私の知らない前の聡子さんの名残だろう……人はどうなってもその人であり続けるらしい。積み上げた過去の残滓が聡子さんの口からこぼれ出している。思わず顔を伏せた。

それを強さときっと表現出来るだろうが、正直ここまで人であろうとする姿はぞっとする自分がいた。

どうしてここまでになっても、人であり続けるのだろうか。感情を持ち続けるのだろうか。

人間らしさ、その人らしさってある意味拷問だ……それに加えて、嬉しいとか悲しいとか痛いとか苦しいとか感情を持ち続けるなんて私だったら耐えられない。

心も何もかもを崩壊させて、植物のようにモノのように生きたほうがいい。

だけど聡子さんは聡子さんのままで生きている。

どんなに認識力や判断力が落ちてても、聡子さんは死ぬまで聡子さん

として生き続ける。

家族から預けられた命だから、お客様だから……あれ？　そういうはずだね。

私、さつき花岡さんの鼻を砕きたくなるくらい殴りたくなったよ……理性があっても追いつめられたら、私は私でいられない。化け物と同じじゃない。

だけど聡子さんは、そうにはならない認知症だ。聡子さんは聡子さんだけが分かる世界にいるから。そういう風にしてもいい場所にいるから。

……いったい、何が正しいの。

いったい、何が幸せなの？

そして私は、聡子さんや花岡さん、他の人を「そこ」へと連れていくの？

大丈夫だと思って暮らしてもらえるの。

私は親指の下にある十円玉くらいの痣を見て、聡子さんの顔を見た。えへへ、へへと子供っぽく聡子さんは笑っていた。ちょっと泣きなくなった。色々な意味で。

「ありがとうございます」

ゆっくりと私は言った。聡子さんはうれしそうにぱんと両手をあわせた。

「そういう顔って良心が疼くよねー」

上司は言った。

そして聡子さんの痣について自分の推測を話し出した。

「あれね、十中八九は介助時の痣だね。聡子さん、散歩して腕を上げることもあるけど、どうしてもあんな痣を作るのは難しいと思う」

「親指の下で、しかも硬貨ぐらいの大きさですしね」

上司は頷いた。

「そうだねえ。調べたらね、介助者が手を引いたときに当たる場所だったよ……聡子さんは立っているのもおぼっているから。あんま

りそういう介助をよくないはずなんだけど……」

ふといつも余裕を感じる笑みを浮かべる上司の顔に苦々しさが浮かんだ。眉をひそめて息をつく。

「よくないはずなんだけど、やっているんだよねえ」

ぐったりと疲れた表情を顔に上司は浮かべた。

そういえばいつ出来たのか、現場がおさえられていないが明らかに介助時に出来る痣がこのユニットでは多いと聞いたことがある。

「そうなんですか……」

声のトーンを落としながら私が言うと、上司は私を見た。

「やっぱりさ、嫌じゃない。聡子さんはここにこしてるから尚更に」

「はい……そうですね」

「自分に嘘ってなかなかつけないでしょ。良心は特に」

「はい」

私は深く頷きつつも、心の中で呟いた。

「でも言い訳は、どうなのだろうか」

物事を腐らすのは、良心の疼きを無視する嘘じゃない。

状況をしようがないと解釈することだ。

しょうがないから、その利用者さんのためにならないから、こういう環境だし時間も迫っていたら。

私はさっきそのしょうがないさに感情的になっていた。

だけどそれが当然になったら？ 感情もわかず適切な処理だと思って行動したら。

私は思わず自分の腕を強く握った。怖いと思った。麻痺する感覚が、密やかな傲慢が、当たり前が。

絶対どんな時でも忘れないという保証は何処にあるのだろう。

当たり前、常識なんて傲慢なものを信じて、やっと暮らして生きてきた自分が。

神経がまいりそうなくらい疲れていた。

私は荷物をとって上司に挨拶して仕事を終えた。そうして最後ユニットを覗くと早番の職員が足早に利用者の一人の歩行を介助しながら

ら歩いていた。

利用者は久世さんだった。トイレが近くて気をつけないと漏れやすい方で、思考が昔の記憶に回帰しやすく自分は小学生だと思っている時がある。そんな久世さんの甲高い声がした。

「どうしてそんなことするの！ 痛いよ！」

背がとても低い久世さんのおしりにそえられた職員の手は、明らかに力が強くこめられていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1824m/>

十円玉くらいの痣

2010年10月17日04時36分発行